小の虫・大の虫

小の虫

大の虫

石川達三

新潮社

小の虫（小の虫）・大の虫（大の虫）

石川達三

新潮社

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

小の虫・大の虫
昭和五十四年九月二十日　発行
昭和五十五年二月二十日　二刷
定価一二〇〇円
著者　石川達三
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話業務部〇三二六六一五一一一
編集部〇三二六六一五四一一
振替東京四一八〇八番
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷　二光印刷株式会社　製本　神田加藤製本株式会社
© Tatsuzō Ishikawa 1979 Printed in Japan

小の虫・大の虫＊目次

年頭小誌 7
私の経済感覚 12
沖縄県人について 16
をんな正月 20
犬嫌い猫嫌い 24
反対運動 28
絵そらごと 32
天皇崩御 37
愛の涸渇 41
義務教育 45
私の動物学 50
性悪説 54
大正ニヒリズム時代 58
環境破壊 118
私のブラジル 122
疑問の数々 127
河童の居る川 131
完全犯罪 135
夫唱不随 140
文明人と野蛮人 144
掘り出しもの 148
特別委員会 152
南洋の民話 157
過剰文明 162
「有事立法」とは何だ 166
或る生涯 170

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

むかしの早稲田 64
核兵器と日本 68
交通規則 72
万成石 77
近代医学 81
悪法も法なり 85
農業のすすめ 89
南洋の真珠 94
月母天女 98
函館の思い出 102
日本の裁判と弁護士 106
私の富士山 110
犯意と犯罪 114
心のなやみ 174
矢崎弾の話 179
長寿について 183
博奕について 188
感覚と表現 192
日本人と「会議」 196
神経衰弱 200
毛沢東批判 204
国会議員のAさん 209
公害と環境 213
自動車と私 217
巨大な彗星 222
短気は損気 226

「自由」の在り方 230
秋田市楢山裏町 234
「多数決」を疑う 238
鳥類図鑑 242
商人の道義 247
賭博者の知恵 251
不完全文化 255
男って馬鹿ですね 259
むかしの教育 263
をんな運転 267
面白いこと 271
私の憎まれ口 275
できない事 280
米良さんの事 284
新・徴用法 288
悪徳の時代 293
服装について 298
猫を飼って 302
文明制限法 307

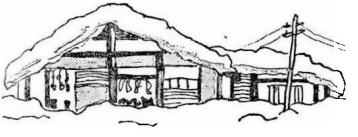
小の虫・大の虫

年頭小誌

新しい年を迎える。その分だけ、私はいよいよ古くなる。若い頃は生意気にも、(正月が何だ)などと大きな口を利いた覚えがあるが、年々の正月も残り少くなって見ると、貴重に思わざるを得ない。新しい年をむかえて新しく何ができるという訳ではないが、ただ自分は自分なりにこの一年を大切に生きて行こうと思う。

昭和五十三年。いろいろな事はあったが、ともかくも五十三年続いて来た。この日本の大変革の時代を直接体験して来たということも、一種の幸運であったかも知れない。西暦では一九七八年。二十世紀の四分ノ三まで過ぎてしまった。私は一九〇五年の産れだから、まるまるの二十世紀人で、二十一世紀までは生きられそうにもない。

さて、日本の正月には行事がいろいろ有る。つまらない縁起かつぎだと言ってしまえば、それだけの事であるが、古くから伝えられた行事には、昔の人たちの心構えが偲ばれるような気もする。門の前に松と竹を飾る。その意味はこじつけかも知れないが、何となくさっぱりして、新し



げな気分になる。無意味だとばかりも言えない。

（元日の朝汲み上げた水を若水と言う）その水を飲んで一年の邪気を払うと言う。井戸に七五三飾りを付けて井戸の神を祀るという行事もある。井戸水を大切にするという事であろうか。鏡餅を神棚に供えるのは五穀豊穣を祈る気持である。宮中で行われる元日の四方拝も、（天皇が元日の寅ノ刻に四方の神々を拝し、年災を払い、五穀豊穣と天下泰平とを祈る儀式）である。五穀とは稲、麦、粟、稗、及び豆となっている。豆は大豆なのか小豆なのか、ささげのような豆なのか、その区別はわからない。黍は民間に普及しているのに黍はなくて、稗がはいっている。

正月用のごまめという小魚には、たつくりという名もある。もちろん田作りであって、豊作への祈りを意味している。一方では数の子を食べて一族の繁栄を祈る。みな故事付けのような仕来りであって、大した意味はない。けれども五穀豊穣と一家繁栄の二つだけは、動かすべからざる代々の祈願であって、軽々に見過すわけにはいかない。

吾々のはるかに遠い祖先は狩猟民族であって、鳥獣を捕え魚貝を得て日々の暮しを立てていた。その鳥獣や魚貝には限度があるから、村民協同して狩猟を行い、公平に分配して生活していた。鳥獣が減ると生活は窮乏し、また人口が殖えても生活は窮乏した。

その窮乏から逃れるために或る地方では牛を飼い羊を飼った。或る村では芋を植え、麦を植えた。つまり自然に有る食糧に不足して、人間が食糧を作りはじめた。この時を境にして人口は急激に増加し、増加を支えるために五穀豊穣を祈る必要が生じた。日本人は遊牧民にはならないで、農耕民族になった。

いま、この小さな島国に、人口は一億を越えた。豊穣への祈りは民族が生き残るための祈りでもある。正月の恵方詣では主として個人的な願い事であるらしいが、五穀豊穣だけは私も確かに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

祈っておきたい。

ところでこの新しい年を、昭和五十三年と呼びたい人もあり、一九七八年と呼びたい人も居る。外国生活の永かった人や、外人との接触の多い人たちにとっては、西暦紀元に統一するのが大いに便利だと思われるに違いないが、私たち平凡な日本人には日本の年号が一番便利な気がする。今日までの経験はすべて日本の年号で記憶しているのだから、それを急に西暦に当てはめようとしたら、まごついてしまう。

明治二十七、八年が日清戦争で、三十七、八年が日露戦争。西郷隆盛の西南戦争は明治十年で、ペルリの来航は嘉永六年。赤穂浪士の事件は（頃は元禄十四年……）である。それを西暦で言いたくても、千七百だか千八百だか見当もつかない。もしもそれを西暦に統一しようという事になると、お役人はたいてい頭が固いから、（日本の年号を使った者は三年以下の懲役または禁錮……）ということになり兼ねない。

前例がある。メートル法強制がそれであった。メートル法強制はもう十何年の昔になるらしいが、お役人たちは（国会かも知れない）、メートル法を強制して尺貫法を禁止した。曲尺（かねじゃく）、鯨尺を造ることさえも禁止し、密造した者には刑事罰を加えた。ひどい話だった。

これはあまりにも乱暴な規則であったから、たった一人の平民永六輔君の反抗で、当局はみっともない敗北を喫し、刑事罰だけは撤回された。しかし十数年間もひどい規則を強制した責任は、誰も取ってはくれなかった。日本人の尺貫法は遠い祖先以来の使い馴れた計算の方法であった。その何百年の習慣を一片の法令で以て改変させようとしたのは、権力者たちの思い上りではなかったか。……

だからそれと同様に、西暦を使って便利な人もあるが、日本式の年号でなくては用を弁じ難い

人もある。それもまた尺貫法みたいに一片の法令でもって統一しようなどということは、今後とも考えないようにしてもらいたい。メートル法だって、あれで便利な人もあっただろうとは思うが、何も尺貫法を禁止する必要はなかったはずだ。

私は三十年も前から、(国語は生きものだ、国語に手を出すな……) と言い続けて来たが、役人と教育学者の思い上りは、国語をいじっていじって、遂にいじり壊し、滅茶滅茶にしてしまった。言葉というものを、思うように動かせるものと考えたことが、そもそもの間違いだった。尺貫法禁止のまちがいは直ぐにも取り返しが利くが、国語を混乱衰弱させた結果は今後五十年経っても取り返しはできないだろう。立派な国語はその民族の誇りであろうと思うが、今日の日本語は諸外国への恥さらしだ。どうも政治家や役人は、やらなくてはならぬ仕事は怠けているくせに、余計な仕事に手を出したがって困る。

さて、私にとって一番遠い正月の記憶は、明治四十二年か三年ごろ、秋田市の町はずれの、深い雪に降り埋められた真白な風景である。寒さの記憶は全くない。近所の子供たちと雪まみれになって遊んでいた。

元日から二、三日は年賀の客が多かった。あの頃は家長が名刺をもって、近所の町内全部に挨拶にまわることになっていた。だから父は早くから正装して出て行き、母は奥の仕事に忙殺されていた。私は二つ上の兄と二人、袴をはかされ黄八丈の着物をきせられて玄関に坐り、年賀の客の挨拶を受ける係りをさせられた。つまり一番ひまで何も用のない子供たちを母は上手に利用したわけであった。並んでかしこまって、来客があるたびに、悧口そうな顔をして (おめでとうございます) などと、大人のひとと対等にあいさつをする、それが何となく面白くて、退屈しなか

った。

雪のふかいあいだの何ケ月かは、当時は街を走る自動車が有るわけではなし、ラジオ、テレビが有るはずもなく、雪の道では人の足音もきこえず、ときおり空の上から凧のうなりが流れてくるくらいのことで、秋田の冬はまことに静かであった。良いお天気の真昼でさえも、その静けさは、耳が淋しいほどであった。

私の経済感覚

経済学と名のつくものはまるで勉強したことがない。興味を持ったこともない。私の知っている経済学は、（悪貨は良貨を駆逐する）という言葉だけしかない。だから経済について論ずる資格はないし、論ずる気も毛頭ない。

しかし現実の社会で生きている限り、経済と無縁ではあり得ない。だから経済学は知らなくても、経済感覚だけは持っている。学問的にはまちがっているかも知れないが、庶民の感覚としては間違っていない。だいたい庶民は学問に従って生活しているのではない。自分の感覚に従って生活しているのだ。

五十二年の暮ごろ新聞を見ていたら、幼稚園の入園料が五万円から七万円、私立高校の入学金が五十万円と書いてあった。昭和三、四年頃の東大の年間授業料が五十円で、早稲田大学は百二十円であった。昭和十八、九年の戦争末期に私は貯金十万円を持っていた。だから私はいつ死んでも妻子四人が路頭に迷うことはないと安心していた。年間利息およそ五千円。月収四百円あれば部長クラスの生活ができるはずであった。ところが敗戦後のインフレで、わずか三、四年のうちに十万円という貯金は水の泡の如くに消えてしまった。私はインフレの恐ろしさを痛感した。

あの敗戦の混乱の中で、どれだけの家が焼かれどれだけの人が殺されたか。……ところが政府と保険会社とはうまく結託して、何とかかんとか理窟をつけて、火災保険も生命保険もほとんど

払わないで誤魔化してしまった。庶民は大変な被害を受けたが、保険会社の潰れたものは一つもない。戦後はたちまちぬくぬくと復活して、何喰わぬ顔をしていた。つまり政府は庶民の困窮を見捨てて保険会社を助けたのだ。なるほど資本主義とはこういうものかと、私は大いに悟った。庶民は黙って耐えていた。

大正七年八月三日富山県中新川郡に米騒動勃発し、一道三府三十二県に波及。騒動に参加した民衆は七十万人と言われた。これがいわゆる富山の女房一揆である。

私は当時十三歳。山陽地方の田舎町に住んでいたが、その時の物情騒然たる姿を記憶している。普通の白米が一升十八銭から五十二、三銭に騰貴したときに、騒動が起った。せいぜい三倍である。ところが敗戦後のインフレは、一ケ月で倍になり十ケ月で十倍になり、十年ののちには千倍になった。どうして暴動が起らなかったのか、私の経済知識では理解できない。

消費物価が千倍になれば、私の所持金の価値は千分ノ一になる。単純に計算すればその通りだが、これは中の下から下層庶民の理窟であるらしい。

資本企業の方には別の計算がある。だから物価が千倍になっても少しも驚かない。のみならず福田内閣と企業家たちは景気を持ち直す為に、何とかして物価を引き上げようと、庶民の隙を覘っている。油断も隙もならない。のみならず、庶民が臍くりを溜めた僅かな貯金の利息まで、引き下げをやった。どこまでも庶民を貧乏にする政策である。

だから庶民は自分の貯蓄をさえも信用することができなくなり、今のうちに使った方が得だという絶望的な経済観を持つに至った。そこで身分不相応な買物をする。身分不相応な外国旅行をする。猫も杓子も自動車を買う。それを追いかけるようにして生産者は、（消費は美徳だ）などという宣伝をする。

庶民は今やことごとく其の日暮しだ。病気をしたら施療病院へ入れてくれ、年老いたら養老院へ入れてくれ、俺は知らないよ……という自暴自棄である。政府が悪いのだ。そして一方では教師にむかって小学生に道徳教育をしろと言う。そんな口先きだけの道徳が、何の役に立つものか。

五十二年十一月頃にドルが下り円が上った。円が上るという事が良いのか悪いのか、よく解らないが、円が四、五円上っただけで小さな輸出企業がばたばた倒れた。身分不相応な、無理な営業をやっていたに違いないが、そればかりではない。税制が悪いのだ。年間所得の何割を遠慮会釈もなく取り上げてしまう。だから小企業には余力もないし蓄積もない。不景気が来ると忽ち潰れる。政府が潰したようなものだ。

田中角栄という男は最悪の政治家だったと私は思っている。日本列島改造論などという乱暴なことを言って結果として日本中の地価を暴騰させた。政治責任という言葉はあるが、彼が責任をとったという話は聞いたことがない。地価暴騰のために日本中のサラリーマンは、退職金で老後の家を建てる望みを失った。農民は田地田畑の暴騰で、一時的に大金を握ったものも少くないが、その代り先祖伝来の田畑は資本企業者の所有に帰した。恐らくは二度と農民の手には戻らないだろう。地価の騰貴につれて一般消費物価も騰貴し、インフレはますます激化した。

その田中が総選挙では悠々と当選した。投票する人が居るのだから私が何を言っても始まらない。しかも彼は自民党内で今もなお最大の実力者で、福田総理を陰で操っているというのだから、また何をか言わんや。

昔のすぐれた政治家は（民を養う）ことを心がけた。民を富ませ民を豊かにすれば世はおのずから治まった。今の政治家は民を枯らしてしまいそうだ。取れるだけ絞り取って、今や民を絶望させてしまった。庶民にはもう余力がない。だから老父母を養うこともできなくて養老院に送り、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com